



この歴史資料室では、山梨大学教育人間科学部に関わる数多くの資料を展示しています。18世紀末の甲府学問所から21世紀初頭の現在に至るまでの、施設・設備の図や写真、実際に使用された器具・用具、当時の息遣いが聞こえるさまざまな文書、書籍が収められ、本学部の歩みを一目にして知ることができます。



主要展示物 解説



江戸期から明治初期にいたる資料

「杭有売者法帖」乙骨耐軒書

「杭有売者法帖」は、劉文成の「誠意伯劉文成公文集」巻七に収められている「賣柑者言」を収める。劉文成（リュウ・ブンセイ = 諱は基、字は伯温1311~1375）は明の政治家・詩人・学者で、明の太祖を補佐し、詩文ともに明初の大家であった。乙骨耐軒の書になる。

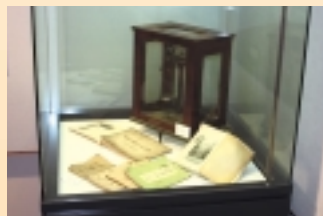
明治期の管理文書

190㉔ 明治33 年度
山梨県師範学校男子炊事部「金銭出納簿」



師範学校時代より使用された学生用机

右手側面に師範学校の焼き印がある。多くが廃棄されたなか奇跡的に残ったもので、1960年代まで使用された。



明治後期から昭和前期にかけての資料

「関西修学旅行案内」(193㉔ 昭和6 年)

山梨県尋常師範学校では、明治21年の冬季休業中にはじめて修学旅行が実施、陸軍の行軍に倣って、ランドセルを背負いゲートルを巻き銃を担いで、静岡、神奈川、埼玉、東京の各府県を一週間ほど、鉄道、汽船も利用して踏破した。明治30年代以降、鉄道網が整備されるにともなって、輸送機関の集団利用という訓練的側面と首都や名勝地への見学旅行という側面から、修学旅行は中等教育機関を中心に幅広く定着するようになる。



「附属中学校校歌額 われらの道はここにあり」土岐善麿作ならびに書(195㉔ 昭和27 年)

土岐善麿（とき・ぜんまろ = 188㉔ 明治18 年]~ 198㉔ 昭和55 年]）歌人、国文学者。初期には湖友、哀果などと号す。府立一中を経て明治41年早大英文科卒。大学時代北原白秋、若山牧水らと同級。早大卒業後「読売新聞」に入社、「東京朝日新聞」に移り、定年まで務め、文芸部長・調査部長・論説委員を歴任。中学時代より作歌を始める。明治43年、ローマ字歌集『NAKIWARAI』を出版、初めて短歌三行書きを実行し、石川啄木と並び称せられた。また、大杉栄や荒畑寒村ら社会主義者と友好をもち、社会主義文学・労働文学との関わりも深い。戦中は自由主義思想派歌人として時局抵抗歌を発表。戦後は広範な文化活動に従った。なお、東京学芸大学附属高等学校、名古屋大学教育学部附属高等学校など多くの高等学校、中学校、小学校の校歌を作詞した。



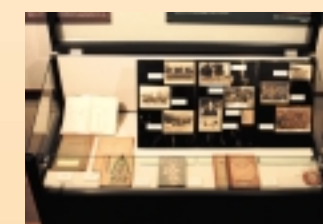
戦時下の困難な時代の資料

戦時中の「教育実習録」(194㉔ 昭和19 年)

B29による東京空襲なども始まり、すでに敗色覆いがたい昭和19年。文部省の規程によれば、教育実習は12週間にわたって行うこととなっていたが、勤労動員などにより授業もほとんど開かれないうなか、この年の教育実習はわずか十日間であった。実習開始にあたっての師範学校長の訓辞も、「恰も神風特攻隊が少数の飛行機を以って物量を誇る敵に突入し必死必殺の猛攻を以って一機一艦を屠ってゐるのである様に、諸君もこの特攻隊と同じ心境で敢闘し大いなる戦果を収めて欲しい」と悲壮であると同時に、締めくくりに言葉は、「総べてが戦力増強の為になる様にやって貰ひ度い」と全てを戦力増強へと収斂させようとするものであった。

各時代の通信簿

明治期から昭和期に至る通知簿



実習録を覗くと、上空へ侵入したアメリカ軍機に対して、「まもなく児童下校と云ふ時、敵の一編隊九機が頭上に悠々と飛んでゐる。しゃくにさわた」と怒りを隠さないが、同時に「敵ともあなどるべからず。優秀なる技術と、膽力を持っておると認め得る」と冷静な観察も忘れてはいない。